



2020年(令和2年)度生
の募集スタート!

ナラティブ・セラピー

実践トレーニングコース

【ナラティブ・セラピーとは…】

オーストラリア人のマイケル・ホワイトとニュージーランド人のデヴィッド・エプストンという、2人のセラピストの貢献を中心に形作られた治療的枠組みのことです。これは、精神医学や心理学の疾患名や障害名、分類のような見方から人を理解するのではなく、すべての人には自分の人生を生き抜いていくことができる資質、能力、可能性があるのだと考え、会話を通してそのような可能性を探っていくアプローチです。

【このコースが目指す到達地点】

このコースは、ナラティブ・セラピーの哲学的な姿勢と基本的な技術や言葉遣いを対話によって学び、自分の一部としていくことを目指します。トレーニング修了後には、受講者の方が、それぞれの領域で自分なりにナラティブの思想に基づいた実践を積み上げられるような土台が形成されることを目的とします。

【募集要項】

募集期間： 2019年11月3日(日曜日)まで(課題のエッセイの提出をもって、応募完了と見なします)

募集人数： 12名程度

コース受講費： 年28万円+消費税

受講応募先： <http://bit.ly/2ZMrDjH>

課題： エッセイ(最大6000字程度)

テーマ： 「私がナラティブ・セラピーを学びたいわけ」

応募条件：

- ☆ 2年間を通してトレーニングコースに参加できる人
- ☆ 多少なりともナラティブ・セラピーに取り組んできた人
- ☆ 対人援助職に就いている方、あるいは援助を提供する立場としてナラティブ・セラピーを学ぼうとする人

選考について：

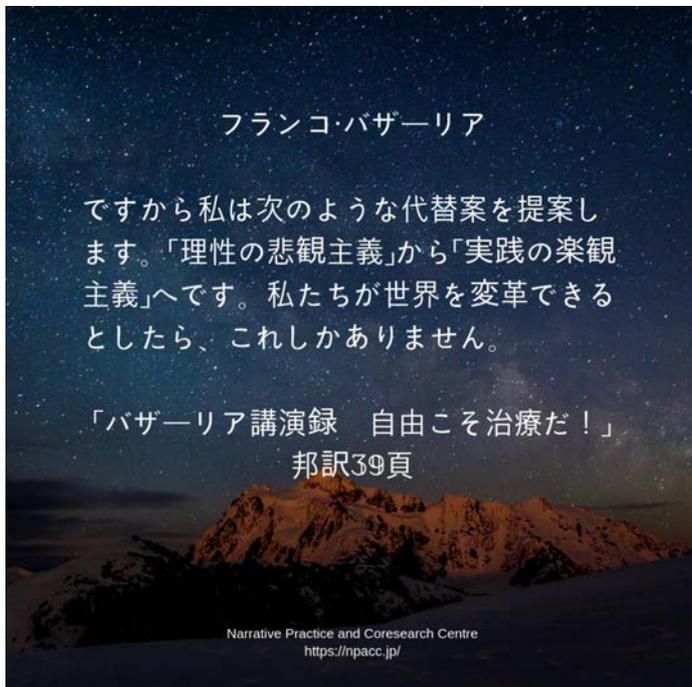
- ☆ 申込フォームに記入していただいた内容
- ☆ 応募時に提出いただいたエッセイ(書類審査での選考が難しい場合には、インタビューをお願いすることもあります)

「ナラティブの学び」とは...

ナラティブ・セラピーは、社会構成主義やポスト構造主義の思想に貢献した哲学者や思想家のアイデアを背景とした哲学的な姿勢をヒントに、実践を作り上げてきました。そして同時に、会話実践をジャズの即興演奏に例えるなど、会話の持つ即興的で創造的なプロセスにもしっかりと目を向けます。

ナラティブ・セラピーを学んでいくプロセスにおいては、その思想や哲学を理解する取り組みの中で、会話や相手、世界の見方を新たにしていく過程を要します。加えて、そのようなアイデアを、即興的で創造的な仕方で、自身の言葉遣いの中に反映させていく、実践の感覚や技術、経験に取り組んでいくことも必要となります。

このようなことは、「正しい知識ややり方を誰かに教わる」という形で、一朝一夕に身につくことはありません。「多くの文献やアイデア、実践に触れながら、自分で考え、実践して到達していく」プロセスが不可欠なのです。



フランコ・バザーリア

『ですから私は次のような代替案を提案します。「理性の悲観主義」から「実践の楽観主義」へです。私たちが世界を変革できるとしたら、これしかありません。』

「バザーリア講演録 自由こそ治療だ！」邦訳 39 頁

私たちは今、できる限り講義ではなく学生との対話を試みています。なぜそうするのでしょうか？
従来型の「教える」という概念は個人主義に基づいているため、関係性の中から意味が生まれるということが考慮されておらず、機能不全に陥っています。

このため、私たちは「学生の頭の中に知識を流し込む」ことが教師の務めでだという考えとは決別しました。

メアリ&ケネス・ガーゲン

「現実はいつも対話から生まれる」邦訳110-111頁

Narrative Practice and Coresearch Centre
<https://npacc.jp/>

メアリ&ケネス・ガーゲン『私たちは今、できる限り講義ではなく学生との対話を試みています。なぜそうするのでしょうか？ 従来型の「教える」という概念は個人主義に基づいているため、関係性の中から意味が生まれるということが考慮されておらず、機能不全に陥っています。このため、私たちは「学生の頭の中に知識を流し込む」ことが教師の務めでだという考えとは決別しました。』

「現実はいつも対話から生まれる」邦訳 110-111 頁

本トレーニングコースの特長

実践とディスカッションの往還

このトレーニングコースでは、ナラティブ・セラピーを理解するヒントとなるような、さまざまなコンテンツやワークに取り組みながら、みなで振り返り、ディスカッションしていく場を豊富に用意していきます。また、ナラティブ・セラピーの会話をクライアントとして体験すること、その会話をそばで見学参加すること、会話自体を自分で試していくこと、そうした実践に触れる取り組みを多く用意していきます。こうした実践ベースおよびディスカッションベースの学びを行き来することで、受講者の方が自分で学びとっていくプロセスに貢献していきたいと考えています。

共にナラティブと向き合う2年間

ナラティブのアイデアや実践に集中的に向き合う2年間となります。それは、表面的には理解しがたいものにじっくり向き合っ

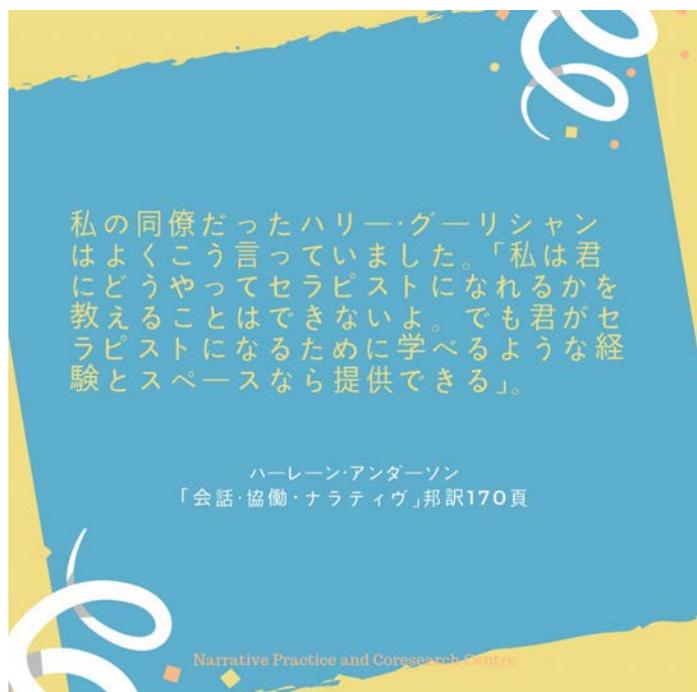
たり、新しいがゆえに違和感のある会話の技術や言葉遣いを体に馴染ませていくための時間となるでしょう。

そのような取り組みを自分一人だけで貫徹するのは、不可能ではないものの容易でもありません。同じものを学ぶ仲間やファシリテーター、学びを支える環境は、私たちが絶えず考え続け、話し合い、理解を進めていくために必要不可欠なものとなるでしょう。

実践と OW&R チームによる学び

OW&R（オウル）チームとは、「アウトサイダーウィットネス&リフレクティングチーム」を呼びやすくしたものです。これは、OW&R チームという第三の立場の人間が、カウンセラーと相談者のカウンセリングの場に同席し、適切なタイミングで会話に参加していくという、ナラティブ・セラピーが提案する治療的实践です。

受講者は、この OW&R チームに参加することで、実際のカウンセリングに同席し、そこにコミットしていく機会を得ることになります。これは、デモセッションやロールプレイ以上の学びの機会となると考えています。



ハーレーン・アンダーソン

『私の同僚だったハリー・グーリシャンはよくこう言っていました。「私は君にどうやってセラピストになれるかを教えることはできないよ。でも君がセラピストになるために学べるような経験とスペースなら提供できる」』

「会話・協働・ナラティブ」170 頁

資格について

このコースにおいて最後に修了証を発行しますが、「ナラティブ・セラピスト」という肩書の認定書は発行しません。なぜならば「ナラティブ・セラピスト」という名は、この土台をスタート地点とした試行錯誤の実践を続けることを意味するものであり、何らかのコース修了によって付与されるものではないからです。付け加えるならば、私たちは資格発行ビジネスに与したくないのです。

トレーニングプログラム

このトレーニングコースは、二年間ですべてのカリキュラムに取り組んでもらうことによって、十分に学ぶことができるように設計されています。

一年次および二年次は、それぞれ年 8 回、計 16 日間の課程となっています。

一年次課程

文献購読やさまざまなコンテンツのディスカッションを通して、ナラティブ・セラピーのアイデアや実践の中核をなす、哲学や思想的背景への基礎的な理解を深めていきます。そして、実際に会話の練習やワークも行いながら、ナラティブ・セラピーの持つ言葉遣いに少しずつ慣れていきます。また、受講者自身がクライアントとして、ナラティブ・セラピーのセッションを受け、その内省や逐語の振り返りなども行っていくこと、OW&R チームとして実際のカウンセリングに同席し、参加していくことで、実践への理解を深めていきます。

二年次課程

文献購読や会話のワーク、ディスカッションも進めながら、「ツリー・オブ・ライフ」や「修復的实践」などの、ナラティブのアイデアが息づくさまざまな実践を通して理解を深めていきます。また、OW&R チームに支えられながら、自分自身でもカウンセリング実践を行い、その逐語録やビデオの振り返りを通して、より実践的な学びに進んでいきます。そして、自分自身の関心についての自由課題に取り組むとともに、コース修了に向けた小論文（エッセイ）の執筆を行います。

豊富なアサインメント

16 日間のプログラムに加えて、ナラティブ・セラピーについてじっくり学んでいくためのアサインメント（課題）も豊富に用意しております。以下は、その一部になります。

- 文献購読
- 会話のワークやディスカッション
- ナラティブ・セラピーをクライアントとして体験し、そこからカウンセラーとしての考察に取り組む（1年次）
- 自身の関心に基づく自由課題や、コース修了のための小論文（エッセイ）の執筆（2年次）

プログラム日程

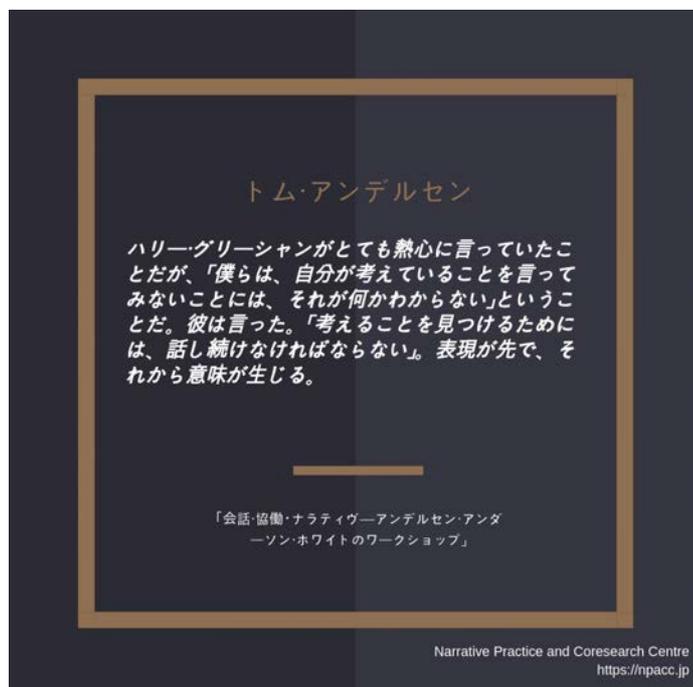
1年次課程（2期生）

2020 3/13~15	NPACC リトリート（任意参加）（国重参加）
1：4/11, 12	イントロダクション：お互いにつながる／自分の声で語ること／コースの進め方など
2：5/30, 31	私たち・支援者を形作るディスコース
3：7/11, 12	ナラティブ・セラピーの実際に触れる （国重参加）
4：10/3, 4	ナラティブ・セラピーを取り巻く言語
5：10/31, 11/1	マップ1：外在化する会話
6：12/5, 6	デモンストレーションから接近する再著述 （国重参加）
7：1/23, 24	マップ2：再著述する会話
8：3/6, 7	結局、ナラティブ・セラピーってなに？
2021 3/19~21	NPACC リトリート（任意参加）（国重参加）

NPACC リトリート（合宿）

トレーニングプログラムに必須のものではありませんが、このトレーニングコースに関わる人たちが一堂に会する合宿を、年に一度行おうと考えています。将来的には、受講予定者、一年次受講者、2年次受講者そして受講修了者が参加できたらと思います。ここでは、どちらかと言えば、緩やかで楽しいつながりの中で、ナラティブを学ぶ仲間と対話や交流の機会を十分持てるような時間となることを期待しています。

なお、NPACC リトリートの参加費用は、コース受講費には含まれていません。別途必要となります。



トム・アンデルセン

『ハリー・グリーシャムがとても熱心に言っていたことだが、「僕らは、自分が考えていることを言ってみないことには、それが何かわからない」ということだ。彼は言った。「考えることを見つけるためには、話し続けなければならない」。表現が先で、それから意味が生じる。』「会話・協働・ナラティブーアンデルセン・アンダーソン・ホワイトのワークショップ」

ファシリテーター

- 横山克貴（臨床心理士 東京大学大学院修士課程修了 ワイカト大学客員大学院生として一年間滞在）
- 白坂葉子（臨床心理士 鹿児島大学の臨床心理士養成のための専門職大学院卒）
- 国重浩一（臨床心理士 ワイカト大学カウンセリング大学院卒）

（ファシリテーションは、基本的に横山克貴と白坂葉子が行い、適宜外部の実践者を招聘します。ニュージーランド在住の国重浩一は、帰国して一部の日程には参加しますし、適宜オンラインのセッションなどを提供します）

会場

NPACC 事務所 東京都中央区日本橋久松町 11-8
シティプライム日本橋 118 4 階 A

募集要項

募集期間： 2019 年 11 月 3 日（日曜日）まで

課題の提出をもって、応募完了と見なします

募集人数： 12 名程度

コース受講費： 年 28 万円 + 消費税

合宿に参加する際の合宿費用、トレーニングコースで必要となる文献の費用などは含まれません。なお、2 年次課程を受講する際の年間の費用も同じく 28 万円となる予定です。

応募方法： <http://bit.ly/2ZMrDjH>

応募に際しては、以下のテーマでエッセイを書いていただきます。

テーマ：「私がナラティブ・セラピーを学びたいわけ」（最大 6000 字程度、文字数は選考には影響しません）

このエッセイを通じて、受講者のことを知りたいと思っています。ナラティブに魅力を感じるためには、今までに大切にしてきたこと、思い、経験など、これまでのことがあったと思います。差し支えない範囲でこれらのことを綴っていただき、その上で、このナラティブ・セラピーを学ぶことが、受講者のこれからの人生、職業、実践について大切なことになるのかについて教えてください。なおこのエッセイは、知っているナラティブに関する知識を確認するためのものではありません。

上記のフォームから申し込んだ後で、次のメールアドレス（narrative@npacc.jp）にエッセイとご自身の写真をお送りください。ファイル形式は何でもかまいません。写真はカジュアルなもので構いません。

応募条件

- ▶ 2 年間を通してトレーニングコースに参加できる人
- ▶ 多少なりともナラティブ・セラピーに取り組んできた人
- ▶ 対人援助職に就いている方、あるいは援助を提供する立場としてナラティブ・セラピーを学ぼうとする人

選考について

- ▶ 申込フォームに記入していただいた内容
- ▶ 応募時に提出いただいたエッセイ（書類審査での選考が難しい場合には、インタビューをお願いすることもあります）

連絡先

ナラティブ実践協働研究センター

メールアドレス：narrative@npacc.jp

担当者：横山克貴、白坂葉子、国重浩一

何でも遠慮なく連絡してください。ナラティブに興味関心を持っていただき本当にありがとうございます。



私たち（セラピスト）の役割は、近代的権力のうっかりした共犯者になることなのか？ それとも、日常生活の多様性を提供することなのだろうか？ 私たちの役割は、ひとつのストーリーに収束する人生観を促進することなのだろうか？ それとも、人生のオルタナティブ・ストーリーという感覚における複雑性を生み出すことなのだろうか？ 面接室は、既知の身近なことを確認する文脈なのか？ それとも、知り得そうなことに到着する文脈なのだろうか？ それは、見知らぬ異国のものを慣れ親しんだものにする文脈なのか？ それとも、慣れ親しんだものを「見知らぬ異国のものにする」文脈なのだろうか？（White, 2011/邦訳 p.41）